

平泉 中尊寺

生きているうちに1度は行っておきたかった場所の1つに平泉があった。場所も場所なので、行こうと思ってもそう簡単に行ける場所ではない。行くことが出来て本当に良かったと感じている。平泉と聞いて、思い浮かぶのは、霧にうっすらと包まれた大きい杉の木に挟まれた参道である。正直、金色堂と聞いても見たことがないもので、あまりピンとはこなかった。



そもそもここではっきりさせておきたいのだが、平泉というのはあくまで岩手県の地名であり、この地域一帯に寺院や遺跡一体があるということである。そのうちの中尊寺、毛越寺、観自在王院跡、無量光院跡、金鶏山が2011年に東北ではじめてユネスコの世界文化遺産に登録されたとのことである。今回、私が訪れたのは中尊寺のみであるが、ここだけでも一見の価値はある。

そもそも中尊寺は850年に比叡山の^{こうそうじかくたいしえんにん}高僧慈覚大師円仁によって開山された。1105年に、^{ふじわらのきよひら}藤原清衡はかつて関所があったとされる関山に中尊寺を造営する。その後、2代目^{ふじわらのもとひら}藤原基衡が毛越寺、3代目^{ふじわらのひでひら}藤原秀衡が無量光院を造立させたことにより、仏教文化に花が開いたとされる。

中尊寺の中で、一際インパクトがあるのはやはり金色堂である。藤原清衡の切実な希望により、極楽浄土の有様を具体的に表現しようとし、1124年に上棟された。残念ながら、金色堂に関しては撮影が禁止されていたので、文章でしか説明するほかないのだが、とに



かく金箔だらけでピンピカリンである。南洋の海から持ってきたとされる夜行貝を用いた螺鈿細工、それに加えて象牙や宝石などで綺麗に飾られており、これを極楽浄土と呼ぶことに逆にいやしさを感じてしまうほどである。金色堂の中を覗いてみると、大きい地蔵や小さい地蔵、さらには金剛力士像までもがた

くさん並べられていた。ここに、今もなお藤原清衡、藤原基衡、藤原秀衡のミイラ化した遺体、藤原泰衡の首が安置されているというのだから興奮してしまう。

1187年、源頼朝との間に亀裂が生じ、追われる身となった源義経は平泉に身を寄せるも、自害する。1189年、頼朝の軍勢に奥州を攻め入れ、藤原氏は滅亡する。平泉に入り、寺々を巡礼した頼朝は仏教文化の世界に引き込まれ、鎌倉に永福寺を建立させた。頼朝は奥州の国務

は藤原氏の先例に従うように命じ、御家人の葛西清重に平泉の安全を保つように命じた。1213年、藤原秀衡が北条政子の夢に現れ、平泉寺院の修理をするよう命じたという。1288年には、金色堂をも修理し、覆堂を設けるなどしたが、平泉内の寺院はどんどん廃れていくこととなる。1337年、中尊寺に大きな火災が起きたものの、戦乱と貧困の中、金色堂や中尊寺経などの寺宝が無事守り伝えられる。しかし、戦国時代に入ると、豊臣秀吉が中尊寺の秘宝「金銀字一切経」「金字一切経」、計4,000巻以上を京都伏見に運び出してしまふ。

江戸時代に平泉は伊達藩領になる。歴代の伊達公は寺の収入を安堵し、堂社を修理するなどして中尊寺を保護する。今もなお参道沿いに並ぶ杉は伊達藩によって植樹されたものであり、実に樹齢350年になる。この参道は月見坂と呼ばれているのだが、なかなか急である。雨の日なんか危ないのではないかと思うぐらいである。伊達公は能楽を愛好していたことでも知られており、古来中尊寺の僧侶たちにより山内の白山神社に奉納されてきた御神事能を推奨し、能舞台を建立し、能装束を奉納した。白山神社に関していえば、境内の中にある能舞台もなかなか立派ではあったが、私がまた面白いと思ったのは十二支一代守護神社である。写真を見て頂ければわかると思うが、十二支それぞれの小さな祠みtainなものがあるのである。祠の下にはちゃんとそれぞれの動物の絵までもが描かれている。これっぽちの信仰心の無い私でもこういうのを見るときちんとお参りしてしまうのである。自分でも本当にバカだと思う。



境内には、松尾芭蕉の像がある。たしかに山形や宮城など東北の方に行けば、何かしら松尾芭蕉に纏わるものが色々な所にある。確かに、全部歩き回って「奥の細道」を書いているぐらいなのである。ここでそもそも「奥の細道」の確認であるが、奥の細道は松尾芭蕉による多数の俳句が交えられた紀行文である。およそ 150 日かけて東北・北陸を巡り、書かれたものである。



旅を終えた 5 年後の 1694 年、芭蕉は死去する。「奥の細道」が出版刊行されたのは、その後の 1702 年である。ちなみに正式な原題は「おくのほそ道」のようである。私が中学生の頃に国語の教科書で習った

夏草や 兵どもが 夢のあと

も芭蕉がこの地で読んだ句である。この兵どもというのがおそらく源義経や藤原氏のことをいっているのではないだろうか。人気もなく、草が生い茂っているだけのこの場所で、彼らがかつて栄華を夢見ていたということから「夢のあと」といっているのではないだろうか。私自身、実際行って見て、ざっとではあるが、一通り、どんな歴史があったのかという事を知り、それを踏まえたうえで、この芭蕉の句の意味を考えるとなかなか感慨深いものである。こんなことなら中学時代にもう少し勉強しておけばよかった。

五月雨の 降り残してや 光堂

光堂というのはおそらく金色堂のことをいっているのだと思うのだが、梅雨の時期のうっとうしい雨でさえも金色堂は降り残している。それだけ金色堂が存在感を放っていて、芭蕉からしてみればある種恐れ多いように見えたのかもわからない。

1950 年に「文化財保護法」が制定され、金色堂が国宝建造物第一号に指定される。また同年に、金色堂に納められている藤原 4 代公の遺体が学術調査され、4 代公の人種、年齢、死因、身長そして血液型までもが判明されるに至った。ちなみに清衡、秀衡が AB 型で、基衡が A 型、泰衡が B 型とのことである。また泰衡の首桶から出てきた副葬品の中にハスの種があった様であるが、なんとこのハスの種が 1998 年に開花したというのである。

1962 年には、金色堂の建物すべてを解体し、半年かけての大修理が行われた。この大修



理により金色堂は一層の輝きを取り戻すことになる。また国の重要文化財に指定されていた木造の覆堂もこの時を期に役目を終え、新しい覆堂が建てられた。覆堂というのは、名前の通り、金色堂を覆っている堂のことであるが、そもそもこの旧覆堂は金色堂の建立後 50 年ほどで簡素な覆屋根がかけられ、増

改築を経て、室町時代中期頃には写真のような形になっていたといわれている。

中尊寺へ行ってきて、一通り、大まかではあるが、歴史を調べてみたが、平安から昭和にかけて色々な事が起きており、非常に興味深いといった印象を受けた。調べてみると、四寺廻廊かいろうというものがあるみたいであるが、これは松島の瑞巖寺、山寺の立石寺、平泉の中尊寺および毛越寺の 4 か所をお参りして廻るというものである。松尾芭蕉がこの 4 か所を廻ったというので有名であるようで、御朱印帳を持って参拝して廻る人が多い様である。世界遺産にも登録されて、それだけ立派なお寺であるというのは実感することが出来たが、確かに目で見ても感動するし、こうやって歴史を知ることによっても考えさせられる場所である。私自身、また機会があれば四寺廻廊もやってみたいし、もっと欲をいえば「奥の細道めぐりの旅」というのも最高の気がする。

ウェバー伊安